

## 法華經の文献学的研究

辛 嶋 静 志

### はじめに

筆者は所謂 Kashgar 本の訳注を進めているが、その際、(1) Nepal・Gilgit 系諸写本（以下 N・G写本）と中央アジア出土の諸写本（以下、中亜写本）の読みの違いはなぜ生じたか、(2)果たしてこの両系統は共通の Urtext に遡るのか、(3)もし Urtext があったとしたらそれはどの様なものであったかという疑問を常に抱きながら作業を進めている。

Urtext の中期インド語的要素に関してはすでに別の箇所で述べた<sup>1)</sup>。また、諸写本間に見られる格の混乱、及び動詞語形の異同については稿を改め論ずる予定である。ここでは、N・G写本の系統と中亜写本の系統の読みの違いが韻律と関係があると考えられる例について見よう。

### 1. *lokanātha* と *lokanāyaka* の交替

法華經の Triṣṭubh（以下 Tr）-Jagatī（以下 Jg）の終止部（cadence）で、諸写本間に *lokanātha* と *lokanāyaka* の対立が見られる。すなわち、N・G写本で *lokanātha*- とあるところが、中亜写本では *lokanāyaka*- とある例が17ある。幾つか列挙して見よう<sup>2)</sup>。

なお、以下の引用文の見方だが、例えば「K. 209. 5 (VIII 32b)」は「Nanjiō-Kern 本 209 頁 5 行目、第 8 品第32偈の第 2 詩節 (pāda)」であることを示す。また、例えば「Tr+Jg」は一半詩偈の前半は Tr、後半は Jg であることを示す。なお、法華經の Triṣṭubh-Jagatī の基本形は次のごとくである (Cf. Edgerton 1936) :

Triṣṭubh: ㄨ-ㄨ-ㄨㄨ-ㄨ-ㄨ; Jagatī: ㄨ-ㄨ-ㄨㄨ-ㄨ-ㄨㄨ

K. 16. 4 (I 53c). kiṃ te 'ha nirdeksyati lokanātho atha vyākariṣyaty ayu bodhisattvān (Tr+Tr); O. kiṃ te 'ha nirdeksyati lokanāyaka atha vyākariṣyamti ha bodhisattvān (Jg+Tr); Stein Collection (Toda 1981 : 266). te vā ya ti deśayi lokanāyako vyākuryya kaścīd iha bodhisattvam (Jg+Tr); Z. 65c3. 世雄導師

K. 25. 9 (I 77ab). yaṃ caiva so bhāṣati lokanātho ekāsanasthaḥ pravaraḅgradharmam (Tr+Tr); O. yaṃ caiva so bhāṣati lokanāyaka ekāsanasthaḥ pravaraḅgradharmam (Jg+Tr); Z. 67a23. 導師化世: L. 5a6. -

K. 46. 13 (II 55ab). bauddhasya jñānasya prakāśanārthaṃ loke samutpadyati lokanāthaḥ (Tr+Tr); O. boddhasya yānasya pravedhanārthaṃ lokasmi utpadyati lokanāyaka (Tr+Jg); Z. 70b19. 導師: L. 8a20. 諸仏

K. 118. 5 (IV 49ab). suduṣkuraṃ(mss. °karaṃ) kurvati lokanātho upāyakaūśalya prakāśayantaḥ (Tr+Tr); O, IOL (Toda 1981: 302). suduṣkaraṃ kurvati lokanāyaka upāyakaūśalya prayojayanta (Jg+Tr); Z. 82c21. 大聖導師: L. 18c12. 仏

K. 252. 11 (XI 14ab). ime ca ye āgata lokanāthā (v.l. °āḥ) vicitritā yair iya śobhitā (v.l. śobhate) bhūḥ (Tr+Tr); O, F, R<sub>1</sub>(No. 12). ime ca ye āgata lokanāyaka vicitritā śobhati yair iyaṃ mahī (Jg+Jg); Z. 104b29. 諸導師衆

K. 294. 9 (XIII 65ab). jñātvā ca so āśayu(v.l. °a) lokanāthas taṃ vyākaroṭi puruṣarṣabhatve (Tr+Tr); O, F. jñātvā ca so āśaya lokanāyakas taṃ vyākaroṭi puruṣarṣabhatve (Jg+Tr); Z. 110a21. -(cf. Krsh. 173-174); L. 39b29. 仏

*lokanātha* (“世界の保護者”) はインド古典 (cf. pw, s.v.) やジャイナ文献 (PSM, s.v. *loganāha*) で Viṣṇu の epithet などとして出るが, *lokanāyaka* (“世界の導師”) は殆ど使われない様である (cf. pw, s.v.). しかし, パーリ文献では, ともに仏の epithet として現われる (e.g. Sn. 991. *lokanāyako*, Sn. 995. *lokanātho*).

確かにこの二つの語は類似した意味を持っており, 交替するのも不思議ではない。しかし, 交替例が Tr-Jg 偈の cadence に限られており, しかも N・G 写本が *lokanātha* (Tr 詩節になる), 中垂写本が *lokanāyaka* (Jg 詩節になる) という様に整然と分かれるのは, 何か理由があると考えられる。

## 2. 一半詩偈に Triṣṭubh と Jagatī が混在

さて, 上に挙げた *lokanātha/lokanāyaka* の交替例を見ると, 総じて, N・G 写本が Tr+Tr の半詩偈 (stanza) であるのに対し, 中垂写本が Tr と Jg の混在形になっている。*lokanātha/lokanāyaka* の対立例に限らず, 法華經の Tr-Jg 偈で N・G 写本が Tr であるのに対して中垂写本が Jg になっている例は, 多数見られる。筆者が法華經 K. 110. 12~296. 2 に出る 363 の Tr-Jg 偈のうち, 河口慧海氏将来東洋文庫所蔵のネパール本 (K') と Khotan 出土梵本 (O) が比較できる 357 偈, 1428 詩節 (pāda) を調べたところ, K' 本の Triṣṭubh 1064 詩節の内, 161 詩節は O 本で Jagatī になっている (15%)。この結果, K' 本の Tr+Tr

の半詩偈がO本で Tr と Jg の混在した半詩偈になっているのは105例に上る。そのうちの多くが語順変更、同義語への置換によるもので、意味の上での違いはない<sup>3)</sup>。

さて、一半詩偈 (stanza) に Tr と Jg が混在する韻律形式は Mahābhārata (Mhbh) の古層にも見られるものである。ところが、Mhbh の他の部分や Rāmāyaṇa では Tr と Jg は混在せず、古典梵語の韻律形式に合致している (cf. Edgerton, "The Epic *Triṣṭubh* and its Hypermetric Varieties", JAOS 59[1939], 159 ff.). Tr/Jg の混在と resolution (後述) から、法華經の Tr-Jg は Mhbh の古層と新層の中間に位置する形式と考えられている (Cf. Edgerton 1936; A.K. Warder, *Pali Metre*, § 276-277)。

法華經以外の仏典の Tr-Jg を見ると、Mahāvastu, Lalitavistara, Samādhirājasūtra (例えば第9章: 132半詩偈のうち混在形 46 [35%]), Rāṣṭrapariṣcchā (62半詩偈のうち混在形 18[29%]) などで Tr と Jg 混在例がかなりの頻度で見られるが、Gaṇḍavyūhasūtra の Tr-Jg 249 偈 498 半詩偈のうち、Tr/Jg 混在例はわずかに 8 例 (2%), Jg+Jg の半詩偈は 6 例 (1%) しかない。さらに、Udānavarga, Mahāyānasūtrālaṃkāra, Divyāvadāna では混在例は殆ど見られない。仏典でも時代が下がれば、古典梵語の韻律形式に合致した Tr-Jg 詩が主流になったのである。

法華經に戻り、K' 本とO本の Tr/Jg が混在する割合を見よう。上述の 357 偈 714 半詩偈を調べたら、次の様な結果になった。

K' 本: Tr+Jg 或 Jg+Tr 238 例 (33%); Jg+Jg 63例 (9%); Tr+Tr 413例 (58%)

O 本: Tr+Jg 或 Jg+Tr 313 例 (44%); Jg+Jg 99例 (14%); Tr+Tr 302 例 (42%)

O 本の方が混在例が多いことが分かる<sup>4)</sup>。

この様に、N・G 写本の Tr+Tr の半詩偈が中亜写本で Tr と Jg の混在した半詩偈になっている例は数多くある。それらの場合、どちらが本来的と考えたら良いのであろうか。これは個々の偈において検討せねばならない問題である。しかし、時代が下がると共に、仏典でも Tr と Jg の混在から分離へと向かう傾向にあることを考えれば、総じて、混在例の多い中亜本の方が古い形を保っていると推定される。lokanātha/lokanāyaka の場合で言えば、中亜写本の lokanāyaka の方が古い形であると思われる。

## 3. Resolution

パーリ仏典<sup>5)</sup>や法華經など梵語仏典では Tr-Jg 偈の第1, 第4, 第5音節が分解する (resolution) 例が時折見られる。このような破格形はインド古典では殆ど見られないものである (cf. Edgerton 1936 : 40, K. Régamey, *Three Chapters from the Samādhirājasūtra*, Warsaw 1938, p. 12, p. 66)。N・G写本と中亜写本を比べると、N・G写本では標準形のところが、中亜本では破格形になっている例がしばしば見られる。例えば、

①K. 197. 1 (VII 99a). nirmāṇu kṛtvā iti tāṃ vadeya (- - - - - - - - - -)

O. abhinirmiṇitvā iti tāṃ vadeya ( - - - - - - - - - - )

②K. 209. 2 (VIII 30d). saddharmasthānaṃ ca samaṃ bhaviṣyati (- - - - - - - - - -)

O. saddharmapratirūpa samaṃ bhaviṣya{n}ti (- - - - - - - - - -) = L. 28c25. 像法

③K. 212. 13 (VIII 38b). utthāya so 'nyaṃ nagaraṃ vrajeta (- - - - - - - - - -)

O. utthāya so nagara vrrajeya anyam (- - - - - - - - - -) ≅ M本

同様の例はN・G写本の間にも見られる。

④K. 195. 7 (VII 92a). yathāṭavi ugra bhaveya dāruṇā (=R, B, T2, 6, 7, 8, N1, N2, A1) ( - - - - - - - - - - )

D1, D (Toda 1988), K', C3, 4, 5, 6, Pk. yathāpi (K'. 'ha) aṭavi bhavi (D1. °e) ugra (Pk. bhavi-d-agra) dāruṇā ( - - - - - - - - - - ) ≅ O本

第二例以外は意味の上での違いはなく、第三、四例に至っては語順を変えているだけである。標準形を破格形にわざわざ変える意図は見い出されない。むしろ、破格形を標準形に直したとみるのが妥当である。中亜本の破格形がN・G写本で標準形で現われる例はこの他にも数多いが、N・G写本の破格形が中亜本で標準形になっているという例は少ない。このことから中亜本の Tr-Jgの方がN・G写本のそれよりも古い姿を伝えていることが分かる。

## おわりに

中亜本、特に所謂 Kashgar 本 (O本) は後世の付加部分や奇怪な梵語化が多いため、N・G写本よりも新しい伝承を伝えるといわれている。確かにO本のみならず、Farhād-Bēg 出土本、Petrovsky Collection など全ての中亜本には、N・G写本にたく後の付加部分と思われる箇所が無数にある。だが、それらはすべて散文部分においてのみである。韻文部分ではN・G写本より少なくなっている (K. 193. 5-7 [VII 81bcd, 82a] はO本, VII 81b は IOL 本にない [cf. Krsh. 120])

水増しされた傷はないのである。まま見られる *hypersanskritism* も伝承の新しさというよりもそもそも正規の梵語ではない言語で伝えられたものを古典梵語に近づけようとした営為の現われとみることができよう。

上に見た様に中亜本の方がN・G写本よりも古い形を伝えている例は少なくないはずだ。中亜本から明かに後世の手になる付加部分を取り除いた上で、N・G写本と比較対照することによってのみ、法華經のより原初的な姿に遡ることができると私は思う。

略号：

Edgerton 1936=Franklin Edgerton, "The Meter of the Saddharmapūṇḍarika", in: *Kuṅṅpuswami Sastri Commemoration Volume*, Madras 1936, pp. 39-45; F=Farhād-Bég 出土本：IOL=India Office Library 所蔵中亜本：Jg=Jagati；K=H. Kern and B. Nanjio, *Saddharmapūṇḍarika*, St. Petersburg 1908-12 (Bibliotheca Buddhica X)；Krsh=Seishi Karashima, *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapūṇḍarikasūtra—in the light of the Sanskrit and Tibetan Versions*, 山喜房仏書林 1992.；L=『妙法蓮華經』：N・G写本=Nepal・Gilgit 系諸写本：O=Kashgar manuscript；R<sub>1-7</sub>, R(1990)=Petrovsky Collection；Toda 1981=H. Toda, *Saddharmapūṇḍarikasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text*, Tokushima 1981.；Tr=Triṣṭubh；Z=竺法護訳『正法華經』：この他、梵本写本の略号は Krsh. 16-18 に従う。

- 1) 「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」(近刊) 参照。
- 2) この他, K. 23. 9, K. 52. 14, K. 96. 5, K. 116. 3, K. 127. 10, K. 145. 12, K. 173. 3, K. 193. 10, K. 207. 7, K. 252. 14, K. 312. 16 のN・G写本と中亜写本の間でこの交替が見られる。
- 3) 例えば, 同じく Tr-Jg 偈の cadence で nātha/nāyaka (K. 62. 14 [Ⅲ 11c] など 6 例), vira (或 dhira)/paṇḍita (K. 310. 5 [Ⅳ 40b] など 5 例), koṭyaḥ/koṭayaḥ (K. 14. 9 [I 44a] など 40 例), koṭih/koṭayaḥ (K. 130. 4 [V 33c] など 3 例), -ānukampī/-ānukampaka (K. 62. 5 [Ⅲ 7a] など 7 例), asti/vidyate (K. 220. 15 [K 11b] など 3 例), cāryā/cārikā (K. 203. 5 [Ⅷ 1d]) などの交替が見られる。
- 4) このことは換言すれば, O本は K' 本よりも Jg を多用しているということになる (上述1428詩節の内, K' 本の Tr 詩節1064例 [75%], Jg 詩節364例 [25%]. O本の Tr 詩節917例 [64%], Jg 詩節511例 [36%])。
- 5) Cf. K.R. Norman, *The Elders' Verses I*, London 1969, pp. xxxvii, xl.

(本稿は文部省科学研究費 [基盤研究(c)(2)] による成果の一部である)

〈キーワード〉 法華經, 韻律, 梵語写本

(東方研究会専任研究員, 真宗大谷派教学研究客員研究員)